

宜保靖の陳述書の矛盾と捏造

2013年4月15日

浦添文化協会

会長 星雅彦

先日私（星雅彦）は那覇地方裁判所民事第2部合議A系の陳述書を見る機会がありました。

琉球新報の記者である宜保靖の立証趣旨を読み、私はその虚構性に異論を唱え、しかも驚嘆した。また彼は実に巧みに嘘をつく。たとえば、宜保が文化部長に就任するまで私の存在を全く知らなかったという。それは真実の告白ではない。彼は琉球新報の文化部部長になる以前から文化部に在籍して補助的な仕事をしていた。その頃、私は琉球新報の故山城興勝から簡単に宜保靖を紹介されたことがある。文化欄では私の拙文を垣間見たこともなかったのだろうか。私は微力ながら約四十年の間、琉球新報の先達に支えられながら美術評論を担当してきた。文化部員でありながら、私を知らなかったというのは、稀有な怠慢社員か、不純な下心を感じさせる。それに彼は質疑応答を組み立てて、私の論文を持ち込み原稿だとしている。仮にそうだとしても、シンプルな地点から純粹に判断すべきではないか。

また、宜保が「何か書いてみませんか」と私に問いかけた時、長い沈黙を破って私が「集団自決」について書いてみようかと思いついたとき、「いいですよ」という彼の言葉に決意を固めたのだった。この過程は骨子でもある。しかるに私は自分の原稿を1200字に固執していたわけではなく、むしろ任意に削除して貰って800字くらいが良いだろうと思っていた。この字数は宜保が勝手に書き直して、投稿のページの「声」「論壇」に載せようとした動機に関連する。私は彼の書き直しも含めて、呆れてまともに返事する気にもならなかった。勝手に私の名称を付記した投稿向けの原稿を嵌め込もうとしたその動機には、私を貶めようとする下心さえ感じられた。

周知のように、沖縄の二紙が「集団自決は隊長命令で行われた」というキャンペーンを当時張っていて、それに異議申し立てているのは「パンドラの箱を開ける時」を琉球新報に連載している上原正稔である。

調査の結果、上原が「軍命は存在しない」説を唱えて、戦記の連載が丁度その表現にさしかかったとき、勝手に打ち切られたという。それで抗議裁判になったわけだが、実は私の「集団自決」の原稿も、その背景を書き始めた要因と、上原の見解とがほぼ一致している。

ところで宜保部長は不思議なことに、私の原稿の内容には一言も触れず、投稿向けに捏造されて、歪んだ工作がここに秘められていたわけである。私の立

場では、宜保靖が正々堂々と社説を述べてくれたら、百歩譲って誤解による煩雑さは省けたはずである。

—以上が私の率直な所信表明です。